

百済仏教寺院の特性形成と周辺国家に与えた影響

—瓦当・塑像・伽藍配置を中心に—

李炳鎬

本稿は、古代寺院に関する文献史料だけでなく出土資料をふまえ、百済仏教寺院の史的展開過程とそれが周辺諸国に及ぼした影響について検討したものである。その概要は以下のとおりである。

第一部では、百済の仏教受容と仏教寺院の成立およびその展開過程を瓦当と塑像、木簡などの出土遺物と伽藍配置を中心に検討した。

第一章では、百済漢城時代の仏教受容過程と初期の寺院について考究した。百済は四世紀後半、枕流王代に東晋より仏教を受容した。百済が仏教を受容したのは、高句麗が仏教を通して前秦との関係を強化したことに対応し、仏教を信奉した東晋の孝文帝との紐帯強化のためであった可能性がきわめて高い。漢城期の仏教関連遺物からは蓮華文をモチーフとする金属器や磁器、瓦当以外は確認されていないが、熊津期初の発正の事例からみて、漢城期末から熊津期初においてすでに仏教活動が行われていたのは認めざるを得ない。また、ソウル風納土城から出土した獣面文瓦当や蓮華文瓦当は、百済が楽浪や高句麗以外に、中国南北朝の諸国家と幅広く交流しており、それを通して仏教文化を輸入した可能性を示唆しており、そうした点からみても、百済にはいち早く仏教が伝わっていたと考えられる。

熊津期になると、具体的に仏教遺物が確認される。武寧王陵出土遺物からは、南朝仏教の影響が認められ、武寧王陵を造営した聖王によって百済で最初の本格的な仏教寺院である大通寺が建立された。だが、大通寺の遺構は現在まで発見されておらず、その具体的な技術系統については、瓦当などの中心に検討せざるを得ないが、大通寺出土瓦当には中国南京地域で見られる特徴的な瓦製作技術が確認される。また、「梁官瓦為師矣」銘磚からも南朝梁の影響が確かめら

れる。さらに、大通寺址より古い段階の瓦当のうち、とりわけ王宮である公山城出土の瓦当は、文献史料などの検討からみて、南斉との関係性が想定される。泗泚都城や慶州興輪寺址では、大通寺式瓦当と文様・製作技術の同一なものが多数発見されていることから、百濟では大通寺造営過程で、官営造瓦工房のような官営手工業体制が成立していた可能性が高いと考えられる。

第二章では、泗泚都城の中央に建立された定林寺址の出土遺物と伽藍配置の特徴を分析し、百濟式寺院の成立過程と泗泚都城における定林寺址の位相について考察した。まず、定林寺址出土の塑像の奉安場所と製作時期、その系統と伽藍配置の特徴を考究し、定林寺址で出土した塑像が、共伴遺物と文献記録からみて、五四一年、梁の工匠・画師などの技術者の直接的な援助を受けて製作されたもので、創建当初には木塔の塔内に安置されていたと考えられる。定林寺址では塑像の製作や造瓦術、緑釉の製作技術、木塔の建立をはじめ、東堂と西堂といった伽藍配置に至るまで、南朝の影響を強く受けていたと理解される。しかし、二重基壇の下成礎石や講堂址東西の別途建物址などは、高句麗の影響と思われ、定林寺は南朝文化を主としつつも、高句麗文化を部分的に受容して造営されたと考えられる。

「定林寺式伽藍配置」は、講堂と回廊が北回廊に連結するのではなく、回廊北端の付属建物や講堂の東西にある別途建物に連結する。この付属建物は金堂より格が低い僧房のようなものと推定されるが、寝食が行われた生活空間である講堂北側の僧房というよりは公的な性格が強いため、ここでは僧房として区分して、「東堂・西堂」としておきたい。

定林寺址から出土した塑像から、創建期の木塔には礼仏図のようなものがあったと推定されるが、これは俗世の支配者を越えて仏教界の支配者たらんとした聖王の意図が含まれていると思われる。梁の武帝が派遣した工匠・画師の存在は、定林寺の建立に梁の専門技術と百濟王室の絶対的な支援があったことをうかがわせ、『日本書紀』欽明紀六年條の丈六尊像造成記録とも関連すると考えられる。すなわち、欽明紀六年條の丈六尊像造成記録は、当時の百濟の状況を反映した信憑性が高く、ここから定林寺の建立は百濟聖王の造像を通した功德の実践であったと理解することができる。

次に、泗泚都城内部における定林寺址の位相を明らかにするため、泗泚都城内部で発見された道路遺跡と王宮の位置との比較分析を行った。六世紀後半の道路と植民地期に製作された地形図と出土木簡、百濟滅亡期の「大唐」銘瓦当などから推定した王宮の位置などを総合的に検討してみると、旧衙里の正方形区画を中心にした王宮区域と定林寺址が非常に密接な関連性をもって、有機的に配置されていたと考えられる。定林寺址は洛陽の永寧寺や南京の同泰寺のように王宮の南に一定の計画にもとづいて造営されたのであり、王宮と共に都城の最も顕著なランドマークであった。

第三章では、泗泚時期の王陵群である陵山里古墳群に隣接して建立された陵山里寺址の性格について考究した。陵山里寺址の中門址南側からは多量の木簡が発見されたが、その性格をめぐっては議論が分かれ、いまだ必ずしも定論に達していない。木簡の記載内容のみならず、出土状況なども勘案し、陵山里木簡の使用時期および廃棄時期ならびにその性格を考察した。その結果、陵山里木簡の多くは、おおよそ五五四年の管山城の戦いでの聖王戦死以後から五六七年の木塔建立時期までに製作・使用され、廃棄されたが、一部は六世紀後半まで製作・使用され、廃棄されたと考えられる。これら木簡の多くが、五六七年の木塔建立前後に廃棄されたことは、それら木簡が陵山里寺址の初期講堂址に存在していた何らかの施設と密接に関連するものであったことを示唆する。また、木簡に記録された内容が仏教や死者の儀礼と関連するもの、物品の生産地と移動、帳簿のようなものであったことからみても、陵山里木簡が陵山里寺址の建立過程と関係していたものであったと理解される。第八次調査で発見された二〇〇二 - 一号四面木簡は、陵山里寺址の建立に動員された人々に食米を支給したことを記録した帳簿のようなものであるが、三〇〇号、三〇六号、三一〇号木簡などの記載内容とあわせて考えてみると、陵山里寺址一帯には米などの物品の移動に関する倉庫施設や行政組織が存在したと推定される。

次に陵山里木簡の性格をより明確にするため、伽藍中心部から出土した瓦当の型式分類と相対編年、建物址ごとの分布状態に注目し、伽藍中心部建物の建立順序について考究した。ここからは五〇二点の瓦当が出土しているが、型式分類の結果、一三種類の蓮花文瓦当と二種類の巴文瓦当、一種類の素文瓦当が

確認され、そのうち、1型式と3・4・9型式が創建期瓦に該当すると考えられ、そのうち1a型式が最も古い段階のものであると理解される。

それをふまえ、各型式の瓦当の建築址ごとの分布状態、暗渠などの排水施設の築造過程、建物址の構造、木簡などの共伴遺物を総合的に考察し、伽藍中心部の建物址の造営過程について攻究した。その結果、陵山里寺址の伽藍中心部は、講堂址とその付属建物である不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、不明建物址Ⅱ、工房址Ⅰなどがまず建立され、その後、木塔と金堂、中門、回廊の順で築造されたと理解される。講堂址を中心にした初期建物址群が木塔址や金堂址に先だって造られたことは、この建物址が寺院とは異なる何らかの特殊な目的を有していたことを示唆する。

陵山里寺址の初期建物址群は、木塔建立以前から機能していたが、それは聖王陵造営にも関与していたと考えられる。初期建物址群の中心をなす講堂址は一棟二室建物で、東西に翼舎がある独特な構造をしている。このような建物構造は集安東台子遺跡に認められ、本来、それは寺院の講堂でなく祭祀関連施設であったと理解される。仏教の盛行していた梁や北魏では、陵墓のそばに仏教寺院が造営された。高句麗でも伝東明王陵と定陵寺において、陵墓と寺院と結合した事例を確認でき、百濟ではそれが陵山里古墳群と陵山里寺址において認められる。陵山里寺址の初期建物址群は、建物の構造と配置、建立時期、出土木簡をはじめとする共伴遺物との関係、五六七年以後の動向などをふまえると、陵山里古墳群、とりわけ聖王陵の築造や追福のための各種祭祀が行われた祠廟あるいはそれに関連する施設であったと推定される。そして、寺院成立以後、講堂址を中心にした初期建物址群は、伽藍の付属施設として機能することになった。このことは、寺院建立以後も陵墓に対する祭祀機能が継続していたことを示唆しており、陵山里寺址の陵寺としての性格をより鮮明に示しているといえよう。

第四章では、扶余と益山地域の百濟寺院の伽藍配置と塑像などの出土遺物について検討を加えた。泗泚遷都以後に成立した定林寺式伽藍配置は、日本の四天王寺式伽藍配置と酷似するが、講堂と回廊が北回廊で連結するのではなく、東・西回廊北端の付属建物、講堂址東西の別途建物と連結し、相違する。この

ような様式の伽藍配置は塑像をはじめとする共伴遺物と文献記録などから、泗泚遷都(五三八年)以後、中国南朝の影響を受けて成立したが、一部、高句麗の影響も受けていたと考えられる。この定林寺式伽藍配置は、六世紀中・後半の軍守里寺址や王興寺址の段階で東西回廊の外郭に建物が造築され、六世紀末以後になると、一部の殿閣が建立されないなどの変化をみせる。七世紀前半建立の弥勒寺址は、三院並列式伽藍配置であるが、これは定林寺式伽藍配置を基本としつつ、中国の多院式寺院や弥勒思想の影響を受けて建立されたと考えられる。百済では泗泚遷都以後から滅亡期まで、基本的に定林寺式伽藍配置が建立されており、それゆえ、これを百済式伽藍配置と称してよかろう。

次に、百済の廃寺址から出土する塑像の展開過程と周辺諸国の塑像との関連性について探究した。百済の塑像はこれまで廃寺址や窯址など一二ヶ所で発見されているが、それらは主に寺院の木塔や金堂に安置されていたものと考えられる。それらは手捏法、范抜によって製作され、成形後に焼いたものや乾燥させたものもある。釉薬が施された塑像や窯址から塑像が出土された事例は必ずしも多くないが、これらは塑像が焼成されたことを明瞭に示す。このことは南京で発見された塑像でも確認され、技術的な系統が南朝と連なる可能性を秘めている。

百済塑像の製作技術の特徴は、高句麗の元五里寺址出土塑像や新羅の四天王寺出土緑釉埴などにも部分的であるが認められ、その関連性が確認できる。日本でも、四天王寺の木塔関連文献や川原寺裏山遺跡出土の塑像などから、百済との関連性が類推される。とくに、川原寺裏山遺跡出土品の場合、廃棄状況だけでなく製作技法も、益山帝釈寺址廃棄場出土のそれと酷似しており、釉薬を使用して焼成した緑釉埴の事例なども考慮すれば、百済滅亡以後の遺民による技術伝播の可能性も想定しうる。

第二部では、百済の仏教寺院・技術の新羅や日本に及ぼした影響について検討した。

第五章では、新羅最初の寺院である興輪寺址と考えられる慶州工業高校一帯から出土した瓦を分析し、百済系瓦製作技術の新羅への伝播過程を明らかにし

た。慶州工業高校一帯から出土した1A・1B型式の瓦当は、大通寺式瓦当をモデルとし、瓦当文様と文献記録からみて、五三五年頃に製作されたと考えられる。ここから出土した1A・1B型式はともに出土した有段式丸瓦と枳板連結式瓦桶を利用した平瓦とセットであるため、単純な道具の移動だけでなく、百濟式瓦製作技術を有した瓦工人の移動による技術の伝播があったと推定される。一部の平瓦では、広端面に同心円文や線文の痕跡が認められるが、これは百濟の造瓦技術の伝播過程において、慶州の土器製作工人たちが動員されたことを物語る。

興輪寺の創建瓦といえる1A・1B型式瓦当は、「興輪寺式瓦当」と言えるが、これはこれまで明らかでなかった新羅の仏教伝来過程における百濟の影響を具体的に示すはじめての考古資料であるとともに、六世紀前半の南朝-百濟-新羅の瓦製作技術・仏教伝来過程をも解明する上で重要である。なお、百濟系技術は、皇龍寺址をはじめとする各種建物址から出土する百濟系瓦当や天官寺址の瓦積基壇建物址などから、七世紀代まで認められる。

第六章では、日本で最初の寺院である飛鳥の伽藍配置と創建瓦を中心に、飛鳥寺と百濟寺院との関係について考究した。飛鳥寺三金堂の直接的な源流を高句麗に求めるという考え方は、伽藍配置以外に高句麗寺院と類似点がないことからわかに首肯しがたい。むしろ、近年の発掘成果から飛鳥寺三金堂は百濟から伝えられたものと理解される。ただ、百濟寺院では飛鳥寺三金堂と全く同一ではなく、それ以前にすでに変容しているため、高句麗文化がストレートに日本に伝わったのではなく、百濟を経由して伝播したと推測される。

五世紀末から六世紀前半にはじまる高句麗文化の百濟への流入は、六世紀中葉になると、しだいに支配者層にまで拡散し、威徳王陵と推定される東下塚には高句麗系統の壁画が描かれている。威徳王は王権を強化するとともに、これまで南朝一辺倒であった外交を脱却し、五六七年に北朝との交渉を開始した。こうした過程で北朝や高句麗の文化を積極的に受容したものと理解される。百濟で飛鳥寺建立に先立って六世紀中後半に築造された軍守里寺址や王興寺址には、独特な建物である東西外郭建物が認められるが、これは単純な居住空間である僧房というよりは、座禅や瞑想の場である禅堂のようなものと推定される。それゆえ、それら寺院は、「僧院」や「別院」などのような多院式寺院の初期の形

態であったといえる。このような新しい要素は、中国の南北朝から隋唐に流行した多院式寺院や高句麗の影響を受けて出現したものといえる。

六世紀中後半に建立された軍守里寺址、五七七年創建の王興寺址、五八四年造築の皇龍寺重建伽藍、五八八年建築の飛鳥寺の伽藍配置は、一定の関連性が想定される。百濟寺院にみえる多院式寺院の初期の形態から、東堂・西堂、東西回廊を取り除いたものが皇龍寺の重建伽藍の三金堂で、それを高句麗的な品字形に変形させたものが、飛鳥寺三金堂と考えられるためである。六世紀、百濟では高句麗の文化が幅広く受容されており、こうしたことから、飛鳥寺三金堂は高句麗からではなく、百濟を経由して日本に伝わったと考えられ、年代的にも近い軍守里寺址か王興寺址がその直接的な祖型と推定される。

高句麗僧侶である慧慈が派遣されたのは五九五年で、それは百濟の技術者集団の倭国到来、金堂・木塔工事着手以後のことであった。したがって、飛鳥寺三金堂の起源を高句麗に求めるのは無理である。飛鳥寺建立のために百濟から派遣された技術者は、国家によって臨時的に組織されたプロジェクトチームのようなもので、各技術部門が有機的に連携していた。そのため、伽藍配置のみが高句麗の影響を受けていると考えるのは困難である。金堂の様式も百濟から伝わっており、東西の金堂の二重基壇や下成礎石も百濟の影響を受けていることをふまえば、飛鳥寺三金堂の伽藍は、百濟から派遣された技術工人たちによって総合的に計画され、造営されたと考えねばならない。百濟は六世紀中後半に新羅の勢力拡大と隋の登場という激動の東アジアにおいて、仏教を媒介とした技術の伝授によって、日本に対する主導権をより強固なものとするため、このような技術支援を行ったのであろう。なお、飛鳥寺の伽藍配置が百濟のそれと完全に一致しないのは、577年に渡倭した造寺工がある程度関わっていたためと推定される。

飛鳥寺建立以後、日本の初期寺院には四天王寺式伽藍配置が採択される。これは百濟の主流伽藍配置である定林寺式伽藍配置を再度、選択したことを示している。ただ、四天王寺式伽藍は通説とは異なり、講堂の東西に別途建物のような施設があった可能性があり、夏堂と冬堂からなる講堂も百濟寺院において確認される、いわゆる一棟二室建物址との類似点が認められる。また、新堂廢

寺と亀石古墳は、陵山里寺址と陵山里古墳群の関係陵山里寺址の関係と同様に、古墳と寺院が結合した事例である。さらに、新堂廃寺の東西回廊で発見された東方建物・西方建物は、定林寺式伽藍配置の東堂と西堂に該当する。こうしたことから、日本の四天王寺式伽藍配置に直接的な影響を及ぼしたのは、定林寺式伽藍配置であったと理解される。

これをふまえ、飛鳥寺創建瓦の源流や瓦博士の性格を解明するために、こうした観点から改めて百濟瓦当の検討を行った。まず、泗泚期の瓦当を廃寺址から出土したものと、王宮関連遺跡から出土したものに区分してみた。その結果、泗泚期の主要寺院では新たな寺院創建に際して、新規の瓦范が製作・使用されるのに対して、王宮関連建物では、特定の文様の瓦范が継続して利用されたことが判明した。さらに、飛鳥寺と年代的に近い王興寺址の創建瓦では、若干の相違点もあるものの、花組・星組系列と最も類似するパターンが認められた。

百濟のさまざまな遺跡から飛鳥寺創建瓦の源流を理解するためには、特定の遺跡や遺物において全く同じものを探すよりは、それを生産した造瓦集団や瓦博士の性格を説明することがより重要である。飛鳥寺の創建瓦を製作した瓦博士は、六世紀中ばから後半にかけての百濟の「王宮と寺院」に使用された瓦を生産した「官営造瓦工場の造瓦集団や技術系官僚」であった。花組は、生産地が必ずしも詳らかではないが、扶余地域の王宮関連遺跡で出土する瓦当を祖形とし、星組は、金德里窯址や王興寺址窯址で活動した造瓦集団と関係があり、大通寺式瓦当を祖形にしていたと考えられる。

百濟寺院では、寺院創建時に新たな瓦范が使用されたように、飛鳥寺においても創建時に新たな文様の瓦范が製作・使用されたが、それは百濟の王宮で使用されていた最新の文様であった。これは記念的建物の建立を通して権威を誇示しようとした蘇我氏の意図的選択であったと考えられる。五八八年に百濟から派遣された瓦博士は、王宮や寺院の瓦を供給した功德部と司空部に所属した技術系官僚で、実務責任者として造寺工たちとともに国家が組織したプロジェクトチームの一員であった。このように日本最初の寺院である飛鳥寺の造営は、百濟の造寺工と瓦博士をはじめとする各種技術者の全面的支援によって行われたのである。

補論では、植民地期の百済故地における古蹟調査事業の展開過程を考究した。百済寺院についての研究は植民地期に始まり、主要遺跡の多くがこの時期に発掘され、それは、その後の研究に大きな影響を及ぼした。植民地期の百済故地における古蹟調査事業は、大きく四期に区分されるが、そのなかでも第四期の扶余軍守里寺址をはじめとする廃寺址調査が注目される。それはこの時期、それまでの慶州や平壤での古墳中心の古蹟調査事業から一転して、扶余の廃寺址が調査されはじめたからである。これには飛鳥文化の源流の解明という日本学界の要求が大きく関わっていたと考えられ、このように百済寺院に対する他者化された視覚がは、戦後の研究にも引き続き大きな影響を及ぼすことになったのであった。

以上が本論の要約であるが、百済の仏教寺院にはさまざまな文化の影響が認められ、国際色の豊かなことがその特徴の一つといえる。大通寺式瓦当をはじめとして扶余定林寺址やその後に建設された百済の寺院には、南朝のみならず高句麗、北朝、隋唐の多様な文化要素が有機的に共存している。先進的な文化要素を速かに入手して洗練された文化を作り出したことこそ、百済の仏教寺院、さらには百済文化全体の特性といえよう。百済はそうした過程で仏教や仏教寺院の造営技術を媒介として周辺国家と積極的な外交を展開し、現実的な利益を得ることができたのである。